

日本河川・流域再生ネットワーク <http://www.a-rr.net/jp/>  <https://www.facebook.com/JapanRRN>

「日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN) の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。

| 目次 | Pages |
|----------------------|-------|
| ➤ JRRN 事務局からのお知らせ | 1 |
| ➤ 会員寄稿記事 | 2 |
| ➤ 会議・イベント案内 & 書籍等の紹介 | 12 |

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクト-『第5回「小さな自然再生」現地研修会 in 千葉県・

神崎川<12月8日(木)>』開催案内

※12/2(金) 17:00 申込〆切

本年度3回目となる、「小さな自然再生」の普及促進に向けた現地研修会を、12月8日(木)、千葉県・神崎川で行います。

神崎川を守るしろい八幡溜の会、白石市のご協力を得て実施する今回の研修会では、神崎川とその周辺の湿地環境や調節池を含めて、みどりのネットワークづくりの視点から神崎川上流部の利活用を考えます。

本研修会の参加申込み〆切は、12/2(金)と迫っておりますので、ご興味のある方は以下のJRRNホームページをご覧ください。

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/745.html>

なお、本活動は(公財)河川財団の河川基金の助成を受けて実施しています。

(JRRN 事務局・後藤勝洋)

第5回「小さな自然再生」現地研修会 千葉県・神崎川

- 日時： 2016年12月8日(木) 10:00~17:00
- 主催： 「小さな自然再生」研究会 (「小さな自然再生」事例集編集委員会)
- 共催： 神崎川を守るしろい八幡溜の会、白井市、JRRN
- 会場： 千葉県白井市 (座学：千葉ニュータウン/現地：神崎川上流部)
- 参加費： 無料
- プログラム：



(午前) 会議室にて「小さな自然再生」に関する座学研修

- 研修会主旨説明 (和田彰：日本河川・流域再生ネットワーク)
- 小さな自然再生の紹介と福岡市室見川での取組み (伊豫岡宏樹：福岡大学工学部社会デザイン工学科)
- 神崎川上流部での取組み (神崎川を守るしろい八幡溜の会、長谷川雅美：東邦大学理学部生物学科)
- 印旛沼流域水循環健全化の取組み (千葉県県土整備部河川環境課)
- 水の循環からみた都市緑地での取組み (菊池佐智子：公益財団法人都市緑化機構)
- 上西郷川における市民主体の川づくりと小さな自然再生 (林博徳：九州大学大学院工学研究院)

(昼休み) 各自昼食

(午後1) 神崎川現地研修 (白井市職員や市民団体の方々に案内頂きながら徒歩にて現地を回ります)

(午後2) ワークショップ「みどりのネットワークづくりの視点から神崎川上流部の利活用を考える」

■ファシリテーター： 西廣淳：東邦大学理学部生命圏環境科学科

- グループ・全体討議 (現地状況を踏まえ、環境保全や自然再生に向けてできることについて協議)。

JRRN 会員寄稿 (1) JRRN Member Contribution

100年経っても現役の素掘りトンネル「二五穴（にごあな）」を巡る

寄稿者：前川太一郎（ライター・編集者／ミツカン水の文化センター機関誌『水の文化』編集／JRRN 会員）

■「使いながら守る水循環」を現地で学ぶ

1999年1月、「水」をテーマとした社会貢献活動として設立された「ミツカン水の文化センター」は、機関誌『水の文化』の発行やさまざまな研究・情報交流活動を通じて、水に対する意識の向上および人と水の新たな関係性を提案しています。

その活動の1つが、今回ご紹介する「里川文化塾」です。一般市民を対象に「座学+フィールドワーク」のスタイルで年に数回開催しています。24回目となる里川文化塾は、房総丘陵の小櫃川（おびつがわ）周辺に今も残るトンネル状の用水路「二五穴（にごあな）」を巡りました。これは江戸時代後期から明治時代初期にかけてつくられたもので、100年以上使いつづけています。

二五穴の名の由来は、幅二尺×高さ五尺（約60cm×150cm）の大きさから。長いトンネルは200～700mあり、これを開渠（ふたをしていない水路）でつなぎ用水路を形づくっています。2016年7月31日に全長7kmの「大戸用水」と全長10kmの「平山用水」の一部を巡り、先人たちの苦労と技術を学びました。

■午前部：講義「江戸時代から続く現役の用水路」

午前中は、「二五穴」を調査・研究されている国立歴史民俗博物館 研究部 教授の西谷大（にしたに・まさる）さん、千葉県立中央博物館 主任首席研究員の島立理子さん（しまだて・りこ）による講義「二五穴の成り立ちと房総丘陵部の里山文化」を聴講しました。

小櫃川上流で現役の二五穴は、「蔵玉・折木沢用水」（全長約5km）、「大戸用水」（全長約7km）、「平山用水」（全長約10km）、草川原用水（全長約3km）と全部で4つ。長いものはトンネルの長さが200～700mもあり、これをつないで一つの用水路を形づくっています。

米をつくるには水を引かなければなりません。そのために昔からさまざまな工夫がなされてきましたが、このようなトンネル状の水路を使って灌漑する水田は全国的にも珍しいそうです。

「地域の自然環境を利用して豊かに生きようとする人々の行為が里山をつくりますが、一言で〈里山〉といってもさまざまな形があり、変化の歴史があります。今日皆さんに見ていただく二五穴もまた、一つの里山のタイプだと思います」と西谷さんは言います。



『丘陵地を水田にした熱意の結晶「二五穴」——100年経っても現役のトンネル用水路を巡る』ルートマップ



平山用水の最後の出口となる二五穴。田植えに備えて3月初旬に水を通し、稲刈りが始まる前（お盆ごろ）に水を止める



二五穴に向かって流れる「大戸用水」。水が自然に流下するように、微かな傾斜を維持してつくられる

左は水を流していないときの二五穴

次に、二五穴以前に房総丘陵ではどのような場所に水田がつくられ、どのような方法で新田開発をしてきたのかについて、島立さんよりお話がありました。

代表的なものに「堰」(貯水池)があります。沢水などをせき止めて堰をつくり、そこから用水を引く方法です。しかし房総丘陵の小さな堰では日照りが続けば枯れてしまい、広い面積を潤すこともできず、安定した収量は見込めませんでした。「川廻し」という方法も行なってきました。蛇行していた河川を人工的にショートカットし、蛇行の跡(水が流れていた部分)を水田にするものです。房総半島南部の河川には、この川廻しの特徴的な地形が今も残っています。ただし、この蛇行跡の水田は大雨が降ると大量の水が入り込んでくるため、鉄砲水によって潰れてしまう可能性があります。そこで、もっと安定して米がつけられる水田を、と考え出されたのが二五穴でした。

「都合のいいときに都合のいい分量だけ水をもってくることができる。つまり、二五穴は房総丘陵特有の水による水田の悩みをすべて解消したことになります。二五穴によって水田が増え、収量も安定しました。二五穴の開削は農業革命だったといっても過言ではありません」と島立さんは言いました。

■午後の部：フィールドワークに出発

午後からは西谷さん、島立さんの案内で二五穴見学へ出かけました。あいにくの天気だったため、ポツポツと小雨が降るなかでのスタートになりました。今回は二五穴を維持管理している用水組合のご協力を得て、ふだんは見られない私有地も含めて大戸用水と平山用水の一部を見学しました。

最初に訪れたのは亀山湖。現在の大戸用水と平山用水の取水源がこの亀山湖で、高さを変えて取水しています。橋の上から取水口の様子を見学しました。

次に向かったのが大戸用水です。ここでは実際に、



亀山湖を望む。写真左の湖水と森の際に取水口があり、貯水量が少ない夏期には見えることもある

わずかですが穴の中に入れ替えて入ることができました。真夏だというのに内部はひんやりと涼しく、土ぼこりのような湿っぽい臭いがしました。穴の中は非常に狭く、大人ひとりが通るので精一杯の広さです。

ちょうど私たちが入った大戸用水のトンネルは素掘り部分だったため、壁に生々しく残るノミの跡もはっきりと見る事ができました。これが180年も前に掘られたものであることを考えると、歴史の重みを感じずにはいられません。西谷さんに説明を受けます。

「壁際にくぼみが見えますが、これはロウソクを立てた跡です。1点は穴を掘る際の明かり取りのため。もう1点は穴を直線に掘らなければいけないので、ロウソクの火が一直線になるとまっすぐに掘れているという目印の意味もありました」

■危険もある二五穴の維持管理

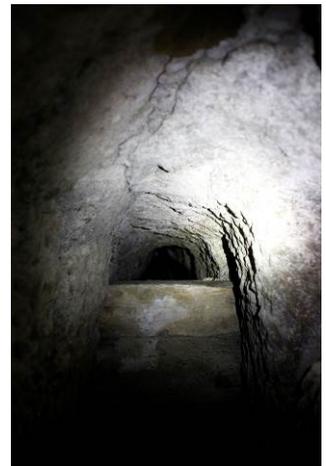
二五穴は現在、土地改良区を中心とした人々によって維持管理されています。どの二五穴も毎年2月半ばから開渠部やトンネル内の掃除を開始し、代掻き前までには田んぼに水が届くように取水源から二五穴に水を流しはじめるそうです。

フィールドワークの途中で、大戸用水組合の理事長を務める鈴木民夫さんにも来ていただきました。大戸用水の一部を案内してもらいながら、実際の掃除や維持管理など貴重なお話を聞くことができました。

鈴木さんの案内で見学したのは掛け樋です。2年前までは鉄製の大きなパイプでしたが、老朽化のためコンクリートに変えたそうです。大戸用水にはこの掛け樋のように水量を調整する場所がいくつかあります。洪水警報が発令されたり、また台風が接近したとき、水量が増えて二五穴を壊さないように、事前に必ず水量を減らしておくそうです。「非常に神経を使う作業です」と鈴木さんは話します。



大戸用水の窓穴から一人ずつ入って、内部を見学



手掘りの跡が残る二五穴の内部。この日は水が流れてこないと蓋がしてある



大戸用水の掛け樋。増水し
そうときは左手前のハンド
ルを回して水を出す

「ダムから取水することで補償金をもらっていますので、それでなんとか大戸用水を維持管理している状態です。大戸用水では毎年春に2回の草刈り・砂出しのほかに、稲刈りが終わった秋ごろに約10名の組合員でトンネルに入り、破損箇所の確認や整備などの点検作業も行なっています。

非常に危険な作業なので当然保険もかけてい

ます」と鈴木さん。作業に参加する人たちは胴長にカッパ、頭にはヘッドライトといういでたちで、鍬(すき)や鋤簾(じょれん)を使って用水路の底に溜まった砂や小石をトンネルの外までかきだします。泥だらけになるうえに、狭い水路の中では相当な重労働です。このような手作業による維持管理があるからこそ、二五穴は現役でいられるのです。

■平山用水にみる「川廻し」地形

続いて向かったのは平山用水です。平山用水は大原神社のある大原台地一帯の水田を潤しています。全長約10kmで、1836年(天保7)に延べ3万9000人が開削に携わり、約3年を費やして完成。山の中を平山用水が走る様子を確認することができます。

「平山用水のこの部分のトンネルは、川の流れとは逆に遡るように掘られ、ぐるりと谷に沿って回しています。最短距離を通らず、なぜわざわざ遠回りをするのか。これはずっと議論になっているところですよ」と西谷さんは言いました。



房総島特有の川廻し地形。中央に見える穴は人がくり抜いたもの。もとの河道(写真右の方向)は水田にした(現在は道路になっている)

この地点でもう一つ特徴的なものが川廻しです。川にトンネルがありますが、人工的な穴です。つまり水田にするために川の流れを変えたのです。「自然を巧みに利用しているように見えますが、川の流れまで変えてしまうような大胆な工事を、昔の人々は行なってきた。里山という概念は、実はそれほどきれいなものではなく、人が徹底的に自然をつくり変えてきた姿とも考えられるのです」と西谷さんは説明してくれました。

■後世に引き継ぐべき二五穴

亀山湖から10kmの地点、平山用水の最後の出口を見学した後は、今回のフィールドワークのゴールとなる大原神社(大原台地)へと向かいます。平山用水組合の理事長を務める石井栄吉さんが、駆けつけてくださいました。平山用水も維持管理は非常に厳しい状況だそうです。「しかし私たちの祖先が苦勞してつくり上げたこれだけの設備をなくしてしまうのは寂しいので、何らかの形で残していかなければなりません。皆さんのように関心をもって見に来ていただけるのは、非常にうれしいことです」という石井さんの言葉をもち、フィールドワークは終了となりました。

大原台地は一見どこにでもある田園風景のようですが、機械のない時代に知恵と技術を集結させて長大な素掘りのトンネルを掘ることができたのは、先人の米づくりに対する熱意にほかならないのです。想像を絶する工夫と、危険と隣り合わせの苦勞を知った今、自分の周囲の人たちにもこうした歴史と事実を伝えていくことが必要なのかもしれない——。そんなことを思った今回の里川文化塾でした。



平山用水が潤す大原台地の水田

■ミツカン水の文化センター

<http://www.mizu.gr.jp/>

■第24回里川文化塾「丘陵地を水田にした熱意の結晶

『二五穴』開催レポート

http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/houkoku/024_20160731_nigoana.html

JRRN 会員寄稿 (2) JRRN Member Contribution

第16回九州「川」のワークショップ in 遠賀川の参加報告

寄稿者：筑波大学白川（直）研究室（JRRN 団体会員）

1. はじめに

2016年11月12日(土)・13日(日), 福岡県北九州市において, 本年度第16回目となる「九州「川」のワークショップ in 遠賀川 ～川で遊び 川に学び そして世界へ～」が開催されました。

筑波大学白川（直）研究室は今回の実行委員会事務局として, 学生は当日スタッフ兼発表者として参加しました。当日は400名を越える来場者とともに川を活かした活動事例を学び, 理解を深めました。2日間の日程は以下の通りです(表1)。

主な内容は以下のとおりです。

◆12日

[ステージ発表]: 川の保全、安心安全、利活用など, 様々なテーマで各チーム3分間の発表を行いました。

[子どもの部交流会]: 発表に参加した子ども達同士の交流会で, 川や水に関係したゲーム等を楽しみました。

◆13日

[アピールタイム]: ステージ発表で伝え切れなかった内容について掲示物を用いた情報交換しました。

[講演]: ミズベリングプロジェクト事務局の山名氏と国土交通省の田中氏より河川関係プロジェクトの活動動向についてご講演いただきました。

[撥川見学会]: 副都心黒崎地区を流れる撥川の見学を行い, 都市河川の整備について理解を深めました。

表1 開催プログラム

| | | |
|-----------|--------------------------|-----------------------------|
| 11月12日(土) | 12:00 | 受付開始 |
| | 13:00 | オープニング |
| | | ・北九州市消防音楽隊による演奏 |
| | 13:15 | 開会式 |
| | 13:30 | ステージ発表 |
| | | ・子どもの部 10組(中学生までの子ども達による発表) |
| | | ・大人の部 40組 |
| | ・子どもの部表彰式(17時ごろ) | |
| 18:00 | ステージ発表終了 交流会場へ移動(アートクラブ) | |
| 19:00 | 交流会(意見交換の場) | |
| 11月12日(日) | 9:00 | 会場開館 |
| | 9:30 | 大人の部 アピールタイム |
| | 10:10 | 選好投票 |
| | 10:20 | 講演会 |
| | 12:00 | 閉会式 講演 表彰式 次回会場への引き継ぎ式 |
| | 12:30 | 終了 |
| | 13:30 | 撥川見学(自由参加) |

2. 1日目(11/12)

(1) ステージ発表

九州各地(とつくば)から集まった48の団体が, 3分の持ち時間で日頃の活動・事業について発表しました。当研究室はトップバッターの重役を担い, 九州内外で行っている以下の活動について発表しました(写真1)。

① 研究紹介

…研究室の研究内容(現地観測, 環境流量グローバルモデル, 渇水経済評価, 河川市民団体)

② 東彼杵プロジェクト

…長崎県東彼杵町において, 「水辺からのまちおこし」をテーマとして行っている受託研究
発表内容: 町民の方々に対して行った水辺との関わり方についての調査と, アユ・ドジョウ・シジミによる地域活性化の取り組みについて

③ 遠賀堀川プロジェクト

…福岡県遠賀川水系の人工河川である遠賀堀川を, 学生の視点で再生する取り組み
発表内容: 堀川の歴史的価値を守るべく雨水を利用して水を流す構想について

④ 常総水害対策チーム

…鬼怒川氾濫水害(昨年9月に茨城県・栃木県で発生)時に行った被災状況の調査・ボランティア活動について

⑤ 水辺で乾杯 in 天の川

…国交省が企画する「水辺で乾杯」を, 大学構内を流れる人工河川(通称: 天の川)で行う取り組み



写真1 発表の様子



写真2 八反田自治会愛護団体（千綿川）の発表



写真5 子ども交流会の様子（水のオリンピック実施）



写真3 東彼杵清流会（彼杵川）の発表



写真4 彼杵おもしろ河川団（東彼杵の水辺）の発表

また今回のワークショップには、白川研究室が一緒に活動している、東彼杵町の市民団体から「八反田自治会愛護団体」、「東彼杵清流会」、「彼杵おもしろ河川団」の3団体が参加しました。「八反田自治会愛護団体」は蛍の愛護と休耕田を活用したドジョウの養殖、「東彼杵清流会」はアユの調査などによる小学生への環境学習、「彼杵おもしろ河川団」はアユの遡上を助ける傾斜坂の製作についてそれぞれ発表しました（写真2～4）。

魚の名前を音楽に乗せて歌う団体や方言を織り交ぜた漫才を披露する団体があるなど、発表の仕方は様々でした。ステージ発表を通して、九州は川に関する活動が盛んであるということを感じることができました。

（2）子どもの部交流会

子どもの部交流会では、ステージ発表を終えた小中学生がゲームや名刺作りを通して交流を深めました。私たちは司会進行を担当しました。

九州の川の名前を使った椅子とりゲームでは、スタッフの方々も交えて大いに盛り上がりました。次に一人一人に白紙のカードを配り、色ペンを使ってオリジナルの名刺作りを体験してもらいました。それぞれ個性豊かな名刺を作っており、子どもの自由な発想に刺激を受けました。完成した名刺を増刷する間に水のオリンピックというゲームも行いました（写真5）。コップいっぱい水を注ぎ、その水がこぼれないようにできるだけ多くの10円玉を沈めるというものです。参加者をいくつかのグループに分け、私たちも大学生チームとして参加しました。

最後は増刷した名刺をお互いに交換しました。短い時間でしたが子どもたちに楽しんでもらうことができましたと思います。

（3）交流会（大人の部）

夜は約250名の大交流会が行われました。交流会には流域市町村の市町村長も来賓としてお越しになり、歓迎の挨拶を述べられました。

交流会では、九州各流域の方々同士の交流がおこなれ、親睦を深めあっていました。また、「遠賀川（作詞・作曲：ハル）」の合唱や「炭坑節」の踊りなどが遠賀川流域の方々の音頭ではじまり、会場に一体感が生まれ、地域色あふれる活気ある交流会となりました（写真6、写真7）。



写真6 交流会での炭坑節の披露



写真9 トーク形式の講演会の様子



写真7 交流会の集合写真



写真10 撥川見学会



写真8 アピールタイムの様子

3. 2日目 (11/13)

(1) アピールタイム

アピールタイム(写真8)は、参加団体が各ブースでパネルやチラシ、道具などを使ってステージ発表で伝えきれなかった想いを直接来場者に伝える時間です。どのブースでも活気ある意見交換が行われ、九州の川を舞台に活動する人々の川に対する意識の高さを窺えました。

私たち筑波大学白川研究室も、緊張しながらもこれまでの活動についてポスターを使って来場者に説明しました。特に興味を持ってもらえたのは昨年の常総水害プロジェクトの活動で、関東に比べ台風が頻繁に襲来する九州の方ならではの感想を頂けました。筑波大のブースを離れ他の参加団体のもとへ足を運ぶと、とても熱心に活動内容を説明して下さり、参考になるとともに同じ九州で活動する団体として刺激を受けました。

(2) 講演会「水辺で人をつなぐ交響事業」

今、水辺の価値が見直されつつあります。今回のワークショップでは、その仕掛け人であるミズベリングプロジェクト事務局プロデューサーの山名清隆氏と、国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境課 課長補佐の田中里佳氏をお迎えし「水辺で人をつなぐ交響事業」と題して講演をして頂きました(写真9)。前半で、市民・行政・企業が一体となって、水辺の新たな活用の可能性を探るミズベリングの動きについてお話し頂いた後、後半は、会場の参加者を交えディスカッションを行いました。それぞれが身の回りの課題からプロジェクトを考えて発表し、独創的で魅力的なアイデアが飛び交いました。

(3) 撥川見学会

ワークショップ終了後、黒崎ひびしんホールの近くにある撥川を見学しました(写真10)。散歩道から見てもわかるほど、透き通った水が流れていました。かつてのホタルを呼び戻しつつある撥川ですが街灯をどうするかで近隣住民との意見交換を行ったそうです。その結果、ホタルが来る時期は街灯を暗めにしホタルへの影響を極力少なくすることで合意ができたそうです。やはり市民の方にも親しまれているようで川を覗き込む親子や走り回る子どもたちの姿がありました。愛される川を未来に残したいという思いが強くなりました。

4. おわりに

今年で16回目を数えるワークショップでしたが、盛会で幕を閉じました。今回、グランプリは選好投票の結果、延岡工業高等学校土木科3年の豊堤班の「豊堤モニュメントの作成」が受賞しました（写真11）。方言を交えた寸劇形式での豊堤に関する発表は会場の注目を集めました。

また、九州「川」のワークショップのリレーフラッグが、実行委員長（笹尾川水辺の楽校運営協議会会長）及び遠賀川河川事務所副所長から、次回開催地である乙津川水辺の楽校運営協議会会長及び大分河川国道事務所副所長へと引き継がれました（写真12）。

次回の第17回九州「川」のワークショップは大分県大野川水系で2017年11月12日（土）～13日（日）に開催されます。また、全国水環境交流会の事務局の堺かなえ氏より、川のワークショップの全国大会である、第20回いい川・いい川づくりワークショップが福岡市で2017年9月23日（土）～24日（日）に開催されるとの告知がありました。

最後に、今回の大会の開催にあたり、いろいろとご尽力いただいた地元遠賀川流域の実行委員会のみなさま、遠賀川河川事務所のみなさまに感謝申し上げます。

筑波大学白川（直）研究室

（今回の訪問者：白川直樹（指導教員）、坂本貴啓、金子貴洋、讃井知、藤原誠士、前田紗希、肥田野美琴、今泉光華）

※写真1, 2, 3, 4, 7は実行委員会 Facebook より引用。

※九州「川」のワークショップの Facebook ページはこちらから

<https://www.facebook.com/ongagawa2016/>



写真11 グランプリ受賞の延岡工業高校土木科3年



写真12 リレーフラッグ引き継ぎ



写真13 いい川をひきつごう！

12月



津南通信 HP より



あの日のあの川 リレー日記 ～第23話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第23話主人公 山田怜奈

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 白川(直) 研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：新潟県信濃川)

「季節を彩る川の記憶」

いつのこと？： 幼少～小学生

どこの川？： 信濃川、中津川

私が生まれ育った町は、川の恵みを多く受ける町でした。

私が住んでいた町は新潟県の南側に位置し、長野県と県境を接しています。その町は信濃川の上流にあり、その支流があちこちに存在します。町自体が川の流れによって川岸が削られてできたもので、その河岸段丘の規模は日本でも有数といわれています。生まれ育った町を離れ早くも数年経った今、あの町にいた時のことを思い出すとそこにはいつも川があります。

住んでいた家のすぐ裏には川が流れていました。その川は深さがひざの下くらいで幅も2m未満の比較的小さな川でしたが、水の流れが速いために近づくことを禁止されていました。実際この年になってもその川に入ったことはありません。しかし、川岸の斜面の上で遊んだり川のそばの道路からぎりぎりまで近づいて川面を覗き込んだりと、今思うと危ないことも多くしていました。

その川は、季節によって様々な様子を見せていました。一番鮮明に思い出すのは真冬の雪が川の両岸に降り積もった時と、春の雪解け水が勢いよく川を流れている時の様子です。故郷の町は豪雪地帯にあり、冬が本格的に始まると雪の日が多く続き、降り積もった雪は景色を一変させます。川の両岸に雪がどんどん積もっていくと、次第に水面が見えなくなり、両側の雪はまるでトンネルのように川を覆い隠します。そうすると傍目から見るとそこに川があるようには全く見えず、朝晩の温度変化で固まった雪の上は小さな時の体重ではびくともしないため、おそろおそろ川の上に積もった雪の上を歩いて遊ぶことができました。箇所によってはトンネルに亀裂が生じていて、上から覗き込むと亀裂のだいぶ下の方には暗闇が広がりそこからは常と変わらない水

の流れる音がして、何も見えないこの雪の下にはいつもと同じように川があるのだと思って面白さを感じていました。

寒さが少しずつ緩み日差しが出てくるようになってくると、雪のトンネルは小さくなっていき亀裂は大きく広がり、川面が見えてきます。もっと時期が過ぎるとトンネルは消えてなくなり常より水量を増した川が勢いよく流れる様子がよく見えるようになります。川岸の斜面でもところどころ地面が顔を出し始め、いつもより大きな水音とザラメ状に変化し日差しを反射して光る雪の間から久方ぶりの緑を見るのが私の中での冬の終わりを感ずる光景でした。川辺に踏の臺やつくしが見え始めても雪はしぶとくあちこちに残り続け、土が混ざり始めて茶色くなり始めた雪の塊の間に植物が育っていきます。踏の臺が背丈を伸ばしていくと、いよいよ農家の一年が始まります。

住んでいた家から車を少し走らせると、私の母の実家があります。小さいころからずっと夏や冬には母方の従兄弟たちとその家に大集合し、何日も泊まり込んで遊ぶのが恒例となっていました。その家には家の周りの半分を囲み家の前の池に続く小さくて細い水路が通っていて、夏はもちろん、冬でもお気に入りの遊び場になっていました。夏には足を入れて水を掛け合ったり、底の砂利や石を手ですくってきれいなものを見せ合ったりしました。冬には雪の塊を投げ入れて水路をせき止めるなど、さまざまな遊びを飽かずに何時間でも続けました。その中でも特に夢中になってやっていたのは笹舟競争です。

家の裏手に回って少し歩くと笹がたくさん生えた森がありました。そこからよさそうな笹を大量に採取しては家に戻って各々笹船を作り、水路が始まる家の脇から一斉に流して速さを競っていました。水路はところどころコンクリートで蓋がされていて、蓋で水面が見えない箇所がありました。そのようなところを舟が通るときは、無事に出てくるか心配でドキドキしながら見守っていました。水路の両側には草が生えていたので、多くの舟は最後までたどり着く前にどこかの草に引っかかって止まってしまったり、作りが雑なせいで沈んでしまったりするのが常でした。そのためどこにも止まらず、なんとか浮かび続け最後まで流れ池にたどり着くのは稀でした。最後までたどり着いたときには、その笹舟が誰の作ったものかによらずみんなで喜び合いました。

あの町を離れ、私が見た景色や出会った人々、経験した出来事は私の世界を大きく広げました。毎日のように新しい人や物に出会い、新たな知識を獲得し目まぐるしい日々を過ごしています。しかしあの町で過ごした日々を思えば、すぐさまあの時の水の冷たさや日差しの暑さ、苔むした川岸を素足で歩いた感触などを鮮烈に思い出すことができます。

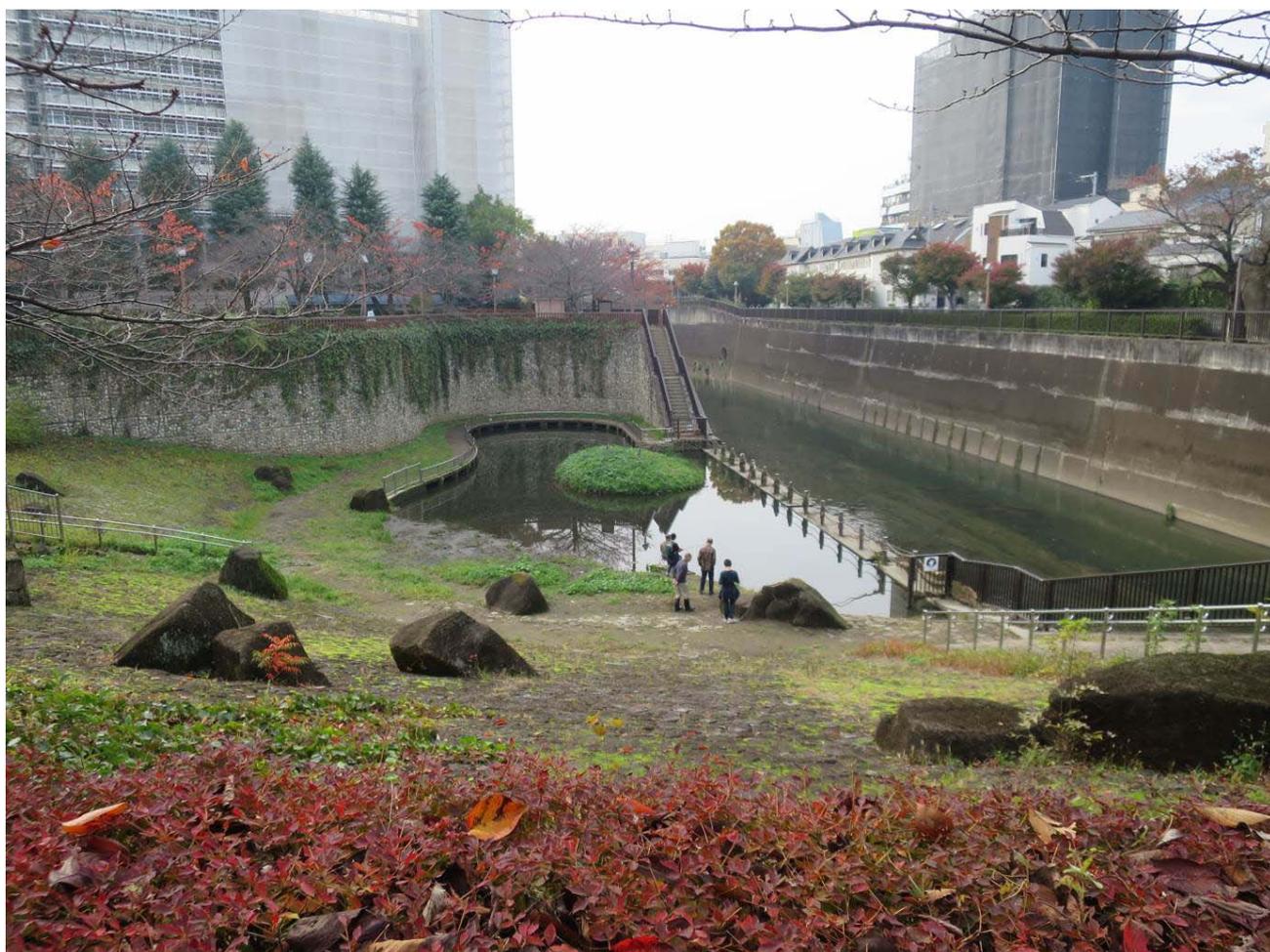
(次は石川弘之さんにバトンを託します)

水辺からのメッセージ No.91

岡村幸二 (JRRN 会員)

音無もみじ緑地：

かつては弁天の滝と呼ばれ、四季を通じて多くの人で賑わう



撮影：2016年11月（東京都北区滝野川・石神井川）

◆川沿いに松橋弁財天洞窟跡

石神井川の蛇行する地に、江戸名所図会でも「この地は石神井河の流れに臨み、自然の山水あり。兩岸高く桜楓の二樹枝を交え、春秋ともにながめあるの一勝地なり。」と記されています。

◆春は桜、秋は紅葉の名所に

すり鉢状になった護岸構造のため、川岸近くまで降りて水辺に近づき、水鳥と魚の群れを間近で見られます。付近は自然観察路に指定されて、野鳥が多く飛来する所でもあります。園名の「もみじ緑地」は、滝野川が滝と紅葉の名所として知られていたことによります。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)

(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

■ 第6回遠賀川中島自然再生研究会

- 日時：2016年12月1日(木) 13:30～16:50
- 主催：応用生態工学会福岡
- 場所：遠賀川水辺館 2F めだかホール (福岡県直方市)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2503.html>

■ 第13回ふくおか水もり自慢! in 古賀

- 日時：2016年12月3日(土) 10:00～
- 主催：第13回ふくおか水もり自慢! In 古賀実行委員会
- 場所：古賀市生涯学習センター (福岡県古賀市)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2482.html>

■ 第5回「小さな自然再生」現地研修会 in 千葉・神崎川

- 日時：2016年12月8日(木) 10:00～17:00
- 主催：「小さな自然再生」研究会 他
- 場所：千葉ニュータウン・プラザ西白井集会所
- ※本紙1ページ目参照

■ ビワマスフォーラム

- 日時：2016年12月10日(土) 13:30～16:00
- 主催：家棟川・童子川・中ノ池川にビワマスを戻すPJ
- 場所：野洲図書館 (滋賀県野洲市)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2501.html>

■ 応用生態工学会岡山 第1回地域勉強会

- 日時：2016年12月17日(土) 13:30～16:40
- 主催：応用生態工学会岡山
- 場所：岡山大学環境理工学部棟 (岡山県岡山市)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2505.html>

■ 第十二回「外来魚情報交換会」

- 日時：2017年1月28日(土)～29日(日)
- 主催：琵琶湖を戻す会
- 場所：草津市立まちづくりセンター3階 (滋賀県草津市)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2493.html>

■ 自然環境復元学会 第17回全国大会

- 日時：2017年2月6日(月)
- 主催：自然環境復元学会
- 場所：日本大学理工学部駿河台 (東京都千代田区)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2491.html>

■ 皆様からのイベント情報提供をお待ちしています!

全国で河川再生に関わる様々な行事が開催されています。ローカル情報のPRや共有を目的に、皆様からの情報提供をお待ちしております。

書籍等の紹介

Publications

■ できることからはじめよう 水辺の小さな自然再生事例集 (2015.3 発刊)

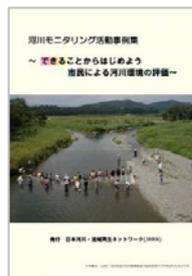
- ・監修：玉井信行 東京大学名誉教授 / JRRN 顧問
- ・編集：「小さな自然再生」事例集編集委員会
- ・デザイン：本間由佳 鶴川女子短期大学
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・出版年月：2015年3月



市民が河川管理者と連携して日曜大工的に取り組む「小さな自然再生」の事例集です。小さな自然再生の専門家の方々、専門知識の社会への橋渡しの専門家、そして有志の若手研究者や実務者で協働制作しました。

■ 河川モニタリング活動事例集～できることからはじめよう 市民による河川環境の評価～ (2014.3 発刊)

- ・監修：白川直樹 筑波大学准教授 (JRRN 理事)
- ・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関
- ・編集：JRRN 事務局、筑波大学白川(直)研究室
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・出版年月：2014年3月



市民が主体的に取り組む河川環境のモニタリング活動の実態を調べ、各地のモニタリング活動事例や市民による河川モニタリング活動の更なる活性化に向けたヒントを紹介しています。

■ 上記冊子の「印刷製本版」入手方法 ※PDF版はこちらから：<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/>

JRRN 事務局までご連絡ください。送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。(JRRN 会員限定)

JRRN 会員募集中 JRRN membership

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

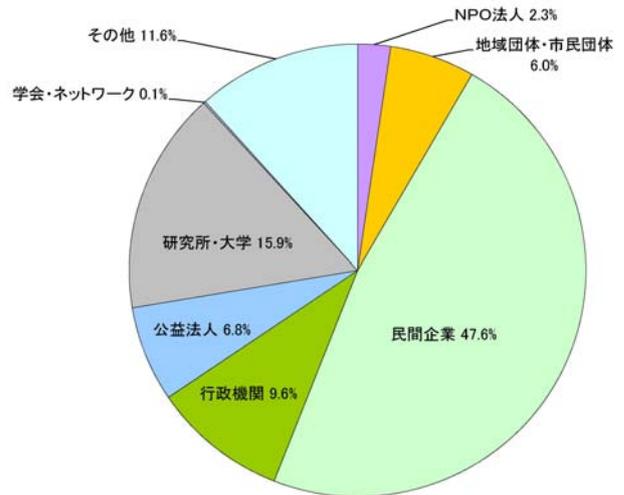
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週1回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2016年11月30日時点の個人会員の所属構成
(個人会員数：751名、団体会員数：60団体)

※11月の新規入会数：個人会員 1, 団体会員 0

JRRN 会員特典一覧表 (団体会員・個人会員)

| 提供サービス | JRRN 個人会員 | JRRN 団体会員 | 非会員 (一般) |
|--|--------------|--------------|-------------|
| 1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1 | ◎ | ◎ | ◎ |
| 2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2 | ◎ | ◎ | ◎ |
| 3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3 | ◎ | ◎ | × |
| 4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3 | ◎ | ◎ | × |
| 5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4 | ◎ | ◎ | × |
| 6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5 | ◎ | ◎ | × |
| 7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6 | △※7 | ◎ | × |
| 8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載 | × | ◎ | × |
| 9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8 | × | ◎ | × |
| 10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9 | × | ◎ | × |

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階 (公財)リバーフロント研究所 内

Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

